

地域のつながりから始まる認知症カフェ ～チームオレンジ組織化に向けた認知症介護指導者の役割～

長野県認知症介護指導者 松谷 学

キーワード: 中山間地 社協 地域のつながり つぶやき
チームオレンジ

活動の概要(活動の主体:法人)

【活動目的】

大桑村では、「認知症の人にやさしいむらづくり宣言」に基づき、社協内に認知症地域支援推進員(認知症介護指導者)を1名配置し、認知症の人の生活支援体制構築の一環として平成 29 年度より「えんがわカフェ」という認知症カフェを月 2 回開設した。指導者が認知症カフェの運営とチームオレンジの組織化についてまとめた。

【活動内容】

えんがわカフェでは、毎回 100 円ずつ集金しお菓子やコーヒーを準備し、90 分ほどおしゃべりをしてゆったりとした時間を過ごす。参加者は旧知の友人同士で、会場まで運営ボランティアの自家用車で訪れる方もいる。また、「花見」、「ぶどう狩り」など、皆のつぶやきや発案を基に認知症の人の外出支援イベントを企画している。活動を通じて、運営ボランティアがお金の支払いや昼食の手配など、一歩踏み込んだ生活支援に気を配るようになってきている。指導者としては、活動の意味付けやボランティア参画を促すための側面的支援を行ってきた。



活動のきっかけ、背景(指導者として・認知症地域支援推進員の立場で)

大桑村では一般高齢者を対象とした「出前カフェ」を村内 21 か所で開催しているが、月 1 回の活動に留まっているため認知症の人の社会参加には繋がりにくかった。また、認知症の人の生活支援体制を構築するには、本人により身近な友人・知人などの協力を得ながら、支援を進めていく必要性があった。

活動の経過と成果

【活動の経過】「地域にもともとあるつながりを活かし、運営ボランティアのつぶやきを尊重する」

カフェの開催には A さんの友人を中心に運営ボランティアを結成するところから始まった。昔一緒に仕事をしていた仲間が集まり「久しぶりで懐かしいね」と話をする中で、「近所にも気になる人がいるんだけど…」という話題になった。徐々に口コミで広がり、「草の根的」に成長していった結果、地域に元々ある繋がりを生かした地域密着型のスタイルとなった。ボランティアとしてカフェに関わる地域住民にとっては、一緒に取組む仲間によって活動の広がり大きく影響することがある。えんがわカフェの取組は、参加する本人を中心にした地域の間関係や地域住民の意欲など、本人を取り巻く地域の実情に合わせて進めていくよう気を配っていた。また、運営ボランティアのつぶやきや発案から「こんなカフェになるといいね」というイメージを皆で共有できたと感じている。

【活動の成果】「本人の様子や関わりの変化を実感しながら「チームオレンジ」へと成長する」



A さんの支援に携わる地域住民を対象に意識の変化についてインタビューした。カフェへの参加を通し、「外出時の A さんの身なりを気に掛ける」、「飲食費等の支払いを気に掛ける」ようになったと挙げられた。このことは、元々ある繋がりが、A さんの外出や社会参加を支援する「チームオレンジ」へと成長した認知症カフェの効果と言える。他にも「外出することで A さんが笑ったり喜ぶ姿が見られるといい」、「自宅訪問だけでなく、外出機会の一つになるといい」という

回答を得た。元々 A さんは「支援の受け手」だったが、普段では見ることのないカフェでの A さんの姿を見て「A さんと一緒に外出を楽しむ」という意識が自然と芽生えてきたことが伺える。

今後の展望

今回紹介した A さんは遠方の子どもさんが月 1 回の受診に付き添い、身の世話をしていた。A さんのカフェへの参加により、支援に携わる地域住民と A さんの子どもとで情報交換が増えたと聞いている。近所付き合いが減る中で、認知症カフェは「近所の他人」と「遠くの家族」が繋がるための資源としての可能性がある。参加者の生活背景などをしっかりアセスメントし、認知症の人自身が地域づくりの資源となるよう地域支援を進めていきたい。

こちらの事例報告は、「認知症介護指導者養成研修等のアウトカム評価に関する調査研究事業報告書(令和 2 年度老人保健健康増進等事業)」の巻末資料【認知症介護指導者の活動事例】からの抜粋です。